Ambiguity Tolerance 研究の展望

小　林　哲　郎

The review of ambiguity tolerance researches

KOBAYASHI Tetsurō

Ambiguity Tolerance（あいまいさに対する寛容性，以下 AT と略記する）の概念は，権威主義的人格（Adorno ら，1950）の研究を行なった研究者の一人である Frenkel-Brunswik（1948）によって提唱されたものである。彼女は，人種的偏見の強い人たちへのインタビューを通じて，彼らは性役割，親子関係，対人関係において，強いか弱いか，清潔か不潔か，良いか悪いかという様な固いカテゴリー化を行ない，その傾向が認知的側面に反映されたものが，低いＡＴになって現われると考えた。即ち，ＡＴの低い人は同じ対象の肯定面と否定面，両面の現実的共存が認知できないのではないかということである。彼らは白か黒かの解決をし，評価のしかたが未成熟であり，しばしば現実を無視し，他者に対して，はっきりしたすべてに渡る受容か拒絶をするのである。

Frenkel-Brunswik（1949）は，「近年，知覚の領域と動機づけ，人格の領域を統合しようとする試みがふえている」と言っているが，当時ブルーナーやポストマンらによってなされていた社会的知覚（知覚が人の要求や期待，過去の経験等によって影響されること）の研究や，視覚像の個人差に基き人格の類型化を行なったイエンシュの考えに興味をもち，精神分析学も理解していたようである。以上のような心理学的素地の上で，ＡＴ概念が考え出されたわけである。

その後は，知覚的あいまいさを利用したさまざまなＡＴの測定法が考えられたが，その妥当性に疑問がもたれるに至り，研究が減ってくる。しかし，Budner（1962）が考え出した質問紙によって，より広汎な研究が行なわれるようになり，現在に至っている。また，現在では，ＡＴ概念は，人間の知覚，認知の個人差を問題とする「認知スタイル」という概念によって，認知的複雑性，固さ[1]，独断主義，場依存性等と共に包括的に把えられている。

本論文は，このＡＴ研究の文献展望を行ない，後半では筆者の研究を紹介しながら，今後のＡＴ研究の課題や方向性を検討することを目的とするものである。

I. 文　献　展　望

1，初期（1950年代）の研究

i）権威主義的人格

ゴールドシュタインら（1982）によると，この研究は，第２次世界大戦におけるファシズムに対する関心に端を発している。反ユダヤ主義がどうして広まっていったのか，偏見をもちやすい人はどのような人かという研究者の問題意識が強くなった時期に，アメリカのユダヤ人委員会が

その研究を支援することになり，バークレーに研究グループができたのである。この研究では，反ユダヤ主義尺度，エスノセントリズム（民族中心主義）尺度，政治経済的保守主義尺度の開発をへて，ファシズム尺度（F尺度）の開発に至ったのである。このF尺度（40／45版）の項目は，因習主義，権威主義的服従，権威主義的攻撃，迷信，ステレオタイプ，力と「頑固さ」，破壊主義と皮肉，投影性と性という9つのカテゴリーで構成されている。

「権威主義的人格」の研究を基盤とする概念に，もう一つ，独断主義（Dogmatism）がある。Rokeach（1960）は，「権威主義的人格」の研究は，政治的右翼にだけ焦点を合わせすぎているという批判をした上で，どのような信念体系にも心を開くことができるか，あるいは閉ざしてしまうかということを測定しようとしたのである。

ii）初期（1950年代）の研究

AT研究は，Frenkel-Brunswik の仮説に基づいて展開していくことになるのであるが，今川（1981）が指摘するように，AT概念を用いた研究は Block & Block（1951）が最初と考えていいだろう。この Block の研究は自動運動を利用したものである。自動運動とは，暗室において1つの光点を見ていると，その光点が動くように感じる現象であり，これを何度も繰り返していると，基準ができ，動く距離が固定してくるのである。彼らは，この固定の早い被験者をATが低いと考えたのである。この研究では，100回の試行の間に基準ができた被験者は，できなかったものよりF尺度の得点が高いことがわかった。自動運動を用いた研究は，Taft（1956）やZacker（1973）によっても行なわれている。また，Millon（1959）は，あらかじめF尺度を施行した被験者に自動運動をやらせたが，半数の被験者は，その知覚実験は知能にも関係する（自我関与群），残りの半数の被験者には，後の実験のための予備実験である（課題関与群）と告げられた。その結果，F得点の高い被験者が基準を早く作るということは実証されたが，自我関与，課題関与の両群とAT，権威主義との間には有意な差はなかった。

Levitt（1953）は，探索決定テストという方法を用いた。この方法は，線が一本ずつ加えられて最後には完全になるという，連続した絵の刺激を使うもので，完全な絵になるまでになされた反応数（「わからない」という反応は除く）が多い程，ATが低いとみなされた。この方法で測定されたATの低さとエスノセントリズムは相関があった。この方法は，Smock（1955 a, b）によって応用された。彼は，刺激の焦点をぼやけた状態から徐々に焦点を合わせていくという方法を用いたのである。彼の実験では，ストレスをかけた群とかけなかった群でのATが比較されたが，ストレスをかけた群の方がATが低くなるという結果を得た。

あいまいな知覚刺激として有名なネッカーの立方体（2通りの見え方をする立方体の図）を使った研究もある。Jones（1955）は，ネッカーの立方体の反転頻度をATの指標としたのである。彼は，権威主義的な被験者が反転頻度が少ないと仮定し，それを支持する結果を得た。

あいまいな刺激ということでは，ロールシャッハの図版を使用した研究もある。Davids（1955）はロールシャッハテストにおいて，実験者が与えた解釈を拒否した数が多い程，ATが低いとした。しかし，この方法で測定されたATは，権威主義とは相関がなかった。これに対して Foxman（1976）は，Klein ら（1951）と Klein ら（1962）の研究に基づき，ロールシャッハの反応からATの指標となるものをあげている。低いATの指標としては，1つの領域に1反応，最も目立つ所やよく使われる部位の使用，多くのP反応[2]，高い F＋[3]％，制限された内容でステレオタイ

プ等である。

ゴールドシュタインらによると，Siegel は，16枚の未知の人の顔写真と，全く関係のない16の叙述文を被験者に呈示し，あてはまる叙述文に写真の番号を書くよう教示した。彼は，ＡＴの低い人の方が数多く組合わせると考えたのである。このテストと権威主義とは有意な関連があった。Draguns ら（1963）も分裂病者にこの方法を用いている。

その他にも，社会的望ましさの異なる人格特性を同じ人が持ち得るかどうかを判定させてＡＴを測定したり（Steiner, 1954），矛盾した物語の想起を用いたり（Kaplan, 1952）とさまざまな方法でＡＴが測定されたのである。

また，最初は，その考えられた方法が，権威主義的人格やエスノセントリズムをうまく反映するかということが研究の目的であったのに対して，しだいに，そのＡＴを測定する方法を用いて，他の要因である自我関与，ストレス等との関連を調べることを目的とする研究〈Millon（1957），Smock（1955 a, b)〉が出てきたことがわかる。

また，O'Conner（1952）は Walk のＡ尺度をＡＴの質問紙として用い，エスノセントリズムとＡＴの相関を得ているが，このＡ尺度は，後に Ehlich（1965）によって信頼性がないことを指摘されるのである。

このように，初期の研究をみると，ＡＴの測定に個々の研究者が恣意的な状況設定をしているように思われ，個々の研究でＡＴの指標とされたものどうしは関連があるのだろうかという疑問が生じるのである。

この疑問に答えるべく，Kenny & Ginsburg（1958）は，それまでにあった種々のＡＴの測度についての検討を試みたのである。彼らのとりあげた測度は，反転図形，Walk のＡ尺度，特性の不一致，自動運動等に権威主義的服従の尺度を加えた13種にも及んだのである。その結果得られた66の相関のうち，統計的に有意であったものは７つだけであり，このうち２つは逆相関を示したのである。

この Kenny らの研究によって，今までのＡＴ測度の妥当性に疑問が生じ，あいまいな知覚的刺激やあいまいな状況設定という実験的状況でＡＴを測定するという研究は減っていくのである。

iii） Budner 以降の研究（1960年以降）

Kenny らによるＡＴ測定の問題点をふまえ，ＡＴ概念について再定義したのは Budner（1962）である。彼の定義は，低いＡＴはあいまいな状況を脅威の源泉として受けとる傾向であり，高いＡＴはあいまいな状況を好ましないものとして受けとる傾向である，とするものである。彼は，刺激に対する個人の反応を現象的レベル（個人が知覚するレベル）と操作的レベル（行動のレベル）に分け，脅威に対する反応を服従と否認に分け，個人が脅かされた時の反応を表１のように考えている。

表１　個人が脅かされた時の反応

反応様式 ＼ 反応レベル	服　従	否　認
現象的	不安と不快	抑圧と否認
操作的	逃避行動	破壊的あるいは再構築的行動

そして，これらの反応が新奇性（novelty），複雑性（complexity），難解性（insolubility）で特徴づけられるようなあいまいな状況から引き出されたものであれば，個人はあいまいさに耐えられないといえるとしている。彼は，この定義に基づき，16項目のＡＴスケールを作成した。この尺度は，ＡＴを簡単に測定できる利点があり，以後のＡＴ研究を促進する大きな力になったのである。その後，Rydell & Rosen（1966）によるスケールや，それをもとにしたMacDonald（1970）のＡＴ—20などが作られたり，Norton（1975）のMAT—50が作られたりした。今川（1981）は，このMAT—50が，信頼性の面でも，固さ[3]や他のＡＴ質問紙との相関でも高い値を得ていることから，最も信頼できる尺度とみなせるとしている。その後は，質問紙に関しては新しいものはなく，Kirton（1981）がBudnerのスケールとＡＴ—20を項目分析した研究があるぐらいである。

ところで，Budner以降の研究は，質問紙の使用により，ＡＴ概念がさまざまな分野に応用されることになったのである。それらを心理学の領域で分けるとすると，大きな流れとしては，社会心理学の領域に関係するものと，臨床心理学に関係するものに分けることができるであろう。

(a) 社会心理学に関係する研究

社会心理学に関係する研究として，まずとりあげねばならないものは，フェスティンガーの認知的不協和理論[4]とＡＴを関連づけたShafferら（1974）の研究である。彼らは，認知的一貫性の欠如による不快な経験は，その個人の独断主義の強さやＡＴの高低によって異なり，一貫性の欠如を低減する様式の好みも違うという報告をしている。

コミュニケーション論に関係したものとしては，Domangue（1978）の研究がある。この研究は，情報をうけとる人の認知的複雑性とＡＴを測定しておいて，言語的—非言語的，肯定的—否定的という２つのレベルを組み合わせた４つの状況で情報を伝えたのである。その結果，複雑性もＡＴも低い人が，言語的には肯定的で非言語的には否定的な状況で，非言語的なサインに気づきにくいことがわかった。

Gloverら（1978）は，シュミレーションゲーム[5]の効果を調べるために，ゲームの前後のＡＴを測定すると，ゲームに参加したグループはＡＴが高くなり，独断主義の得点が減ることがわかった。

Keenan（1978）は，就職のためのインタビューをうける人のＡＴを調べたが，ＡＴの低い人はインタビューの前の不安が強く，インタビューで成功しないことがわかった。

Harlow（1973）は，会社での昇進を好む人とＡＴとの関係を調べ，ＡＴの高い人の方が昇進を好むという結果を得た。

Blakesら（1973）は，購売意欲とＡＴの関係で，ＡＴの高い人は低い人より新製品を買うことに抵抗が少ないことを報告している。

以上のように，社会心理学に関係するとしてまとめた研究は，理論の検証にＡＴ概念を利用したようなものから，会社等で実際に役立つような具体的な研究まで，幅広いものであることがわかる。

(b) 臨床心理学に関係する研究

最近のＡＴ研究の新しい流れになりつつあるのが，臨床心理学に関係するものである。この観点は，心理療法でのセラピストとクライエントの関係をあいまいな状況とみなし，セラピストの

資質とか，その養成にＡＴ概念を利用しようというものである。

Brams (1961) は，効果的なカウンセリングができる人の MMPI，適応指標，MAS，AT について検討し，効果的なカウンセリングができる人はＡＴが高いという結果を得た。

Foote ら (1975) は，カウンセラーのＡＴとクライエントのＡＴの高低を組み合わせて，４群のペアを作った。その結果，ＡＴの高いカウンセラーの方が話す量が多いという，それまでの研究と異なるものであった。この研究は，ペアの数が１群に４ペアぐらいしかなく少ないのが問題である。

Tucker ら (1974) は，セラピストのＡＴのクライエントの好感情や治ゆ過程との関連を調べた。しかし，クライエントのＡＴの高いセラピストへの好感情は増すが，クライエント自身の感情の変化や自己への言及には変化はなかった。

Cook ら (1978) は，モデル学習の理論をカウンセラーの訓練に応用し，専門家のカウンセリングのビデオを見ることで，ＡＴがあがったことを報告している。

その他にも，Caroll (1975) のカウンセリング関係の構成に影響するＡＴと不安の研究，Middlebush (1975) のカウンセラーのＡＴとインタビューの関係，カウンセラーの長期にわたるトレランス・レベルの変化の研究，Ayal (1974) のエンカウンターグループのファシリテーターのＡＴの研究等があるが，それらは有意な相関を得るに至ってない。

II. AT 概念と固さの概念について

ＡＴ概念は，現在では，認知の個人差を問題として扱っている「認知スタイル」という概念の中に包括されている。その中には，認知的複雑性，固さ，独断主義等がある。これらの概念どうしは相関することが多いが，時に混同されることがある。Frenkel-Brunswik (1949) 自身，偏見の強い子どもには，低いＡＴ，現実の歪曲，固さの特徴があるとしているが，ＡＴ概念を明確にしていくためには，他の概念を関連づけるだけでなく，どこが違うかをはっきりさせねばならない。

ここで，筆者が行なった，ＡＴ概念と固さの概念の差違を検討した研究（小林，1981）を紹介し，ＡＴ概念を考える手掛りとする。

調　　査(Ｉ)

i) 目　的

文献展望でも紹介したように Brams は効果的なカウンセリングができる人はＡＴが高いことを見出した。また，カウンセラーの態度としては柔軟な態度が必要であるといわれる（河合，1970）が，ＡＴと柔軟さはカウンセラーの資質とはどのように関わっているのだろうか。本調査では，カウンセラーの共感能力と MMPI の D (抑うつ)，Pt (精神衰弱) 尺度が逆相関する（鳴沢，1975）ことから，D，Pt を共感能力の指標として，AT，柔軟さとどのように関係するかを検討することが目的である。

ii) 方　法

被験者　京都市内私立大学生男子29名女子14名（19—21歳），和歌山大学生 男子66名女子47名（18—23歳）

測度　ＡＴの測度として MAT-50，固さの測度としてはＣＰＩテストの柔軟性尺度[7]（以下

CPI-FX と略記する)，Water-Jar テスト[8]（以下 W-J と略記する）を用い，MMPI も施行された。各テストは，各校で2，3週にわたり，心理学の構議の時間に集団検査方式で施行された。

iii) 結　果

MAT-50, CPI-FX の両測度と MMPI の10種類の臨床尺度との間には，相関は見られなかった。また，W-J と MMPI 各尺度についても Hs（心気症）尺度と正の傾向（P<.10）があったが，他の尺度とは何ら相関がなかった。

ここで，MAT-50 は8つのサブスケールを持っているので，それらのサブスケールと MMPI 各尺度との相関を表2に示す。Dと Pt は Public Image と正相関することがわかる（MAT-50 は高得点程低いＡＴを示す)。

表2．MAT-50 のサブスケールと MMPI 臨床尺度の相関

	Philo-sophy	Inter-personal Communi-cation	Public Image	Job-Related	Problem-solving	Social	Habit	Art Forms
Hs	−.001	−.129	−.008	.047	−.014	−.265***	−.000	−.231**
D	.022	−.098	.236*	.061	.021	−.175*	.110	−.092
Hy	.049	.003	−.013	−.015	−.055	−.254***	−.049	−.203**
Pd	.114	.026	.094	−.067	−.051	−.150	−.007	−.034
Mf	−.152	.081	−.029	−.027	−.130	.065	.084	−.123
Pa	−.003	.087	.185*	.049	−.057	−.099	.032	− 113
Pt	.060	−.066	.233**	.085	−.157	−.118	.088	−.168*
Sc	.007	−.122	.085	.019	−.144	−.090	.001	−.138
Ma	.111	.236**	.012	−.085	.000	.168*	.156	.000
Si	.018	−.133	.346***	.170*	.078	.028	.188**	−.113

* p<.10　** p<.05　*** p<.01

iv) 考　察

MMPI の各尺度とＡＴ，固さの測度との間には相関はなかったが，MAT-50 のサブスケールとの間には相関があった。特に共感能力と関係があるとされる D, Pt に Public Image と正相関があったことは，抑うつ的傾向の少ない人や精神衰弱的傾向の少ない人は，他者の自分に対する評価があいまいであることに許容的であるといえる。従って，ＡＴの総合点では，D，Pt との相関はなかったが，他者の自分に対する評価のあいまいさを許容できる人は共感能力があり，心理療法家としての適性があるといえるだろう。また，Hs, Hy と Social に負の相関があるのは，社会的場面でのあいまいさに許容的な人は，心気症的，ヒステリー的傾向があるということで，外的性と関係するものと思われる。

調　　査(Ⅱ)

i) 目　的

ギルフォードは，多くの解を多面的に探索する思考過程を拡散的思考と呼び創造性の最も大切な要素と考えた。Eiduson（1958）は，芸術家とそうでない人の比較を行ない，芸術家は知覚におけるあいまいさに耐えることができ，人格の崩壊をきたすことなく思考を解き放つことができるとしている。また，穐山（1975）は，創造性の独立した4成分として(a)流暢さ　(b)柔軟さ　(c)

あいまいさに対する寛容さ (d)エラボレーションがあるとしている。このように，ATと柔軟さ一固さは創造性と密接に関連していると思われる。調査IIでは，投映法を応用した創造的検査を用い，創造性の中でのATと柔軟さ一固さの役割の違いを明らかにすることが目的である。

ii) 方 法

本調査のために，投映法を応用した創造性検査として P-F (MR) と SCT-MR が考案された。

P-F (MR) は P-F スタディの刺激を用い，各刺激について制限時間内にできるだけ異なる反応を考えてもらう課題である。被験者の反応が P-F スタディの9種類の評定の内何種類を使っているかを判定し，8刺激（外罰，内罰，無罰の反応のひき出し易さを考慮に入れて選ばれた）の総合得点を個人の AV (Alternative Viewpoint) スコアとした。

SCT-MR は，文章完成法を応用したものであるが，精研式文章完成法の中から“私の父”“私の母”“男”“女”“私は人々”という刺激語が，それぞれ繰り返し4回出現するというように構成された（他の20個の刺激語と上記の語が交互に出現するように配列されている）。それぞれの繰り返し語の文章が対象についての両面的感情を表わしているかどうかを評定し，それを SA (Statement of Ambivalence) スコア[9]とした。

以上の P-F (MR) と SCT-MR を比較すると，P-F (MR) は，刺激に対する自分の視点を一旦壊して違う視点がもてるかということであり，柔軟性に関係すると思われる。また，Frenkel-Brunswik が AT の低い人は，親子関係，性役割，一般的対人関係において両面的見方ができないと述べていることから，SCT-MR での SA スコアは AT と関係があるのではないかと思われる。

被験者 P-F (MR) は，京都市内私立大学生男子39名女子33名（19—21歳），SCT-MR は，和歌山大学生男子64名女子46名（18—23歳）

測度 MAT-50, CPI-FX, W-J の3測度（調査I，IIともデータは共通）と P-F (MR), SCT-MR

iii) 結 果

P-F (MR) の AV スコアは正規分布することが確認されたので，AV スコアと MAT-50, CPI-FX のスコアについてのピアソンの相関係数を表3に示す。

表3．MAT-50, CPI-Fx と AV スコアの相関

	MAT-50			CPI-FX		
AV score	♂	.083	.107	♂	.442***	.248**
	♀	.136		♀	.070	

** $p<.05$ *** $p<.01$

CPI-FX と AV スコアに相関があるが，男女別でみると男子にだけ相関がある。また W-J の0—2点を rigid 群 (N=23)，8—10点を flexible 群 (N=19) とし，各群の AV スコアの t 検定を行なったが，有意差はなかった。また，MAT-50 のサブスケールと AV スコアにも相関はなかった。

SCT-MR の SA スコアは，評点の信頼性を確認するために，京都大学教育学部で臨床心理学

を専攻する大学院生2名に任意の70名のデータについて35名ずつ評定してもらった。筆者の評点との一致率は，92%と95%であり，信頼性は確認された。

SA スコアは正規分布しないので，MAT-50, CPI-FX, W-J と SA スコアについてスピアマンの順位相関を算出すると，SA スコアは W-J と負相関（P<.05）があった。また，MAT-50 のサブスケールとＳＡスコアの関係を調べるために，ＳＡスコアの上位1/4をＳＡ高群，下位1/4をＳＡ低群として両群の平均値の差を *t* 検定した結果を表4に示す。Philosophy ではＳＡスコアの低い群の方ＡＴが低く，Public Image ではＳＡスコアの低い群の方がＡＴが高いことがわかる。

表4，SA 高―低群の平均，標準偏差と *t* 値

	Philo-sophy	Inter-personal Communi-cation	Public Image	Job-Related	Problem Solving	Social	Habit	Art Porms
High SA	25.188 (5.308)†	23.000 (3.010)	21.000 (2.521)	24.412 (3.663)	37.125 (5.337)	44.471 (5.304)	59.941 (7.424)	37.118 (6.239)
Low SA	29.286 (3.936)	20.857 (8.043)	18.800 (2.227)	22.714 (3.692)	38.000 (4.926)	43.688 (6.100)	56.733 (7.461)	36.511 (5.274)
t score	2.384**	0.982	2.464**	1.237	0.455	0.367	1.155	0.279

** p<.05　†( )：標準偏差

iv）考　察

P-F（MR）の AV スコアは，CPI-FX と正相関があったが，男女で異なった。これは，男性の方が実際の社会的場面でも自由な感情の表現が許容されているために，P-F スタディの刺激図の社会的葛藤場面でも多様な反応ができたのではなかろうか。AV スコアが W-J と相関せず，社会的態度に関係する CPI-FX と相関があったこともそのことを支持する。また，この結果は，P-F（MR）で測られる１つの刺激に様々な視点から反応できる能力は，AT と関係せず，CPI-FX で測られる柔軟性と関係することを示しており，創造性の中での柔軟さ―固さの関わり方の知見を一歩深めることができたといえよう。

ところで，SCT-MR の SA スコアは，MAT-50, CPI-FX と相関がなかったが，W-J と負相関があった。この結果は，W-J で固い人の方がアンビバレンドな感情の陳述が多いということになる。その原因の一つは教示にあると思われる。「もし，同じ言葉が出てきても前と同じにする必要はありません」という教示は，繰り返しの意図がテストの信頼性を測定するものではないことを伝えるためのものであったが，W-J で固い人は変えなくてはいけないと受けとったのかもしれない。また，MAT-50 のサブスケールについて考えると，Philosophy で AT の高い人がＳＡスコアが高いのは，善悪，正邪のこだわりのなさが，対象の両面的認知と関係することを示しており，SCT-MR で測定される１つの対象の両面的認知能力が，善悪，正邪等の価値感にこだわらないことに関係することがわかる。それでは，Public Image で AT の低い人が SA が高いという一見逆のように思える結果がどうしてでてきたのだろうか。Frenkel-Brunswik が，AT の低い人は，情動的なあいまいさやアンビバレンスが強すぎて認知的な寛容さがなくなるとして

いる。そのことから考えると，他者からの評価にあいまいでいられない人は，一見安定しているように見える他者への評価（はっきりした好き嫌いなど）の裏に抑圧されたアンビバレントな感情があり，それが，このテストで出てきたのではないかと考えられる。

III. 今後の課題と展望

AT 概念の固さの概念については，他者からのあいまいな評価に寛容な人が，MMPI の D, Pt 尺度を指標とする共感能力をもっていることがわかった。その点についてもう少し考察を加える。Public Image というサブスケールの項目は，「もし，色々な私の親友が私についてちぐはぐな意見をもっていたら，私は困るだろう」，「私はいつも，人々が何を笑っているか知りたい」，「私の行動が他人にどのように影響を与えているかがはっきりしない時，私はひどく当惑してしまう」，「見しらぬ人が私にどのように反応するかわからない時，私は困る」というものである。Putlic Image で AT の低い人は，親しい人から知らない人まで含めた他者が，自分をどう思っているか，自分にどう反応するかがはっきりしない状況が，脅威なのであろう。これは，対人恐怖的心性につながるものであり，もし，カウンセリング場面で，カウンセラーがその状況を脅威と感じるとしたら，治療にならなくなってしまう。逆に，カウンセラーはあいまいな状況を利用しなくてはならない。Bordin (1955) は，①あいまいな刺激は，個人の生活史に基づいた独特な見方を負った反応をひき出す。②あいまいさによって，患者の動機的，情動的構造が付与されることで，治療者は患者の行動の源泉をより完全により深く理解できる。③あいまいであることによって，治療者は患者に彼（患者）の不合理な感情をより鮮明に浮き立たせ，意識化をもたらすような背景を提供できる，としている。このように，他者の評価に対するＡＴは，カウンセラーにとって大切であることがわかる。

しかし，ここでの結果は，MAT-50 の総合点ではないので，単純に AT と共感能力が相関するとはいえないという問題が残る。この MAT-50 の総合点は，調査(II)においてもＡＶスコア，ＳＡスコアとの相関がなかったが，なぜであろうか。筆者は MAT-50 と人格の二面性スケール[10]の関係を調べた時，120の形容詞と MAT-50 の相関を調べた。その中で，MAT-50 の総合点でＡＴの高い人は，「クールな」，「怠慢な」($P<.01$)，「のんきな」，「あきらめのよい」，「人に干渉しない」，「さめた」等 ($P<.05$) という自己像をもつことがわかった。これをみると，MAT-50 の総合点で AT が高い人は，他者との深い関りを好まず，感情が希薄な分裂病質を思わせるような面がある。即ち，広汎な側面でＡＴが高いということは，適度であれば柔軟で寛容な成熟した人格といえるが，極端になると，感情が希薄になり，他者との深い交流をさけることによって傷つくことをさける分裂病質のようなものと関係してくることが考えられる。吉川 (1981) も，高いＡＴと適応性の研究の中で，トレランスは「耐性」であって，それ以上のことを意味しないのかもしれないとしているが，ＡＴが高ければ高い程，適応的，創造的とはいえないのかもしれない。レビューでみたように，治療者の資質としてのＡＴの研究で有意な相関が得られない研究が多いのも，この極端に高いＡＴの問題に関係しているのかもしれない。今後の治療者の資質としてのＡＴの研究では，どの程度の高さのＡＴが望ましいのか，あるいは，他の要因とどのように組み合わされるといいのかという方向での研究を行なう必要があるだろう。

ところで，筆者の研究は必ずしもいい結果ばかりとはいえないが，このように，他の概念，特

に「認知スタイル」いうものの中に入れられるような概念どうしを比較，検討することは，それぞれの概念の位置づけを明確にするし，その概念の独自性をはっきりさせることもできるのである。この種の研究は今まで余りなされていないので，今後の研究の1つの方向になりうると筆者は考えている。実際，AT概念のレビューをみてもわかるように，ATの個々の研究どうしは余り関連をもたないのである。レビューとは，もっと研究の流れを明確に示すべきなのであるが，それぞれの理論にAT概念が利用されているという感じである。心理治療者のATについては興味が集中しているが，よい治療の評定が難しい上に，高すぎるATの問題もあり，今一つ進展をみないのが実状である。

それらの点からも，今後AT研究を発展させるためには，AT概念と他の隣接概念との違いを研究し，AT概念の独自性を明確にさせる必要があるのである。

注

1) Rigidity は硬さと書かれることが多いが，「硬」より「固」の方が Rigid な感じを伝えると思うので，この字をあてる。
2) ポピュラー反応。多くの人によってなされる一般的反応。
3) Figure（形態）を決定因とし，形態水準の高い反応のこと。
4) 個人の認知体系に不協和が生じた時，人はそれを低減しようとし，不協和を増しそうな情報や状況はあらかじめさけるという理論。
5) ここでのゲームは，2つのグループで，それぞれ独自の行動規範をもつ文化を作り，それぞれ相手の文化を訪れた人が，自分のグループに，自分たちの言葉や行為で相手の文化を伝えるというもの。
6) Manifest Anxiety Scale の略で，顕在性不安尺度
7) 日本版 CPI を因子分析し純化した西山（1973）の CPI の柔軟性尺度（15項目）。
8) 水がめの水を3つの桝を使って出し入れし，欲しい量を得るための操作を数字で考えさせる問題。11題あり，途中からはより簡単な方法でも解けるよう構成されている。スコアは0—10に分布し，多い程柔軟とされる。
9) 1つまたは複数の文章で，対象についての両面的感情を含んだ記述のあるものに2点，昔と今の違い，多様性等に言及しているものに1点を与える。得点は0—10に分布する。
10) 森知子（1983）では30対60語であったが，その後60対120語になった。

引用文献

Adorno, T. W. *et al.* 1950 The authoritarian personality. New York: Harper.

Ayal. H. 1974 Tolerance for ambignity and attitudes toward open-education and encounter groupes. Diss. Abst. Inter., 35 (4-A), 2040.

Blake, B. F. *et al.* 1973 The effect of intolerance of ambiguity upon product perceptions. J. Appl. Psy., 58, 239-243.

Block, J., & Block, J. 1951 An Investgation of the relationship between intolerance of ambiguity and ethnocentrism. J. Pers., 19, 301-311.

Bordin, E. 1955 Ambiguity as a therapeutic variable. J. Consul. Psy., 19, 9-15.

Brams, J. M. 1961 Counselor characteristics and effective communication in counseling. J. Counsel, Psy., 8, 25-30.

Budner, S. 1962 Intolerance of ambiguity as a personality variable. J. Pers., 30, 29-50.

Caroll, M. R. 1975 The relationship between tolerance of ambiguity and anxiety as it effects structuring in the counseling relationship. Diss. Abst. Inter., 38 (8-A), 5011.

Cook, D. W. 1975 The effect of differential modeling strategies on counselor performance, anxiety

and tolerance of ambiguity. Diss. Abst. Inter., 30 (1-A)., 127.

Davids, L. J. 1975 An experimental investtgation of tolerance of ambiguity and information in interpersonal bargaining. Diss. Abst. Inter., 36 (2-B), 970.

Domangue, B. B, 1978 Decoding effects of cognitive complexity, tolerance of ambiguity, and verbal-nonverbal inconsistency. J. Pers, 519-534.

Ehlich, D. 1965 Intolerance of ambiguity, Walk's A scale: historical comment. Psy. Rep., 17. 591-594.

Eiduson, B. T. 1958 Artist and nonartist: A comparative study. J. Pers, 26, 13-28.

Foote, M., *et al.* 1975 Tolerance of ambiguity : a variable in client and counselor pairing. Canadian Counsellor, 9, 63-68.

Foxman, P. 1976 Tolerance for ambiguity and self-actualization. J. Pers. Assess., 40(1), 67-72.

Frenkel-Brunswik, E. 1948 Tolerance toward ambiguity as a personality variable. Amer. Psychologist, 3, 268.

Frenkel-Brunswik, E. 1949 Intolerance of ambiguity as an emotional and perceptual personaltity variables. J. Pers., 18, 108-143.

Glover, J. A. *et al.* 1978 Effects of a simulation game upon tolerance for ambiguity, dogmatism, and risk taking. J. Soc. Psy., 105, 291-296.

ゴールドシュタイン K. M. ブラックマン S. 島津他訳 1982 認知スタイル 誠信書房

Harlow, D. W. 1973 Professional employees' preference for upward mobility. J. Apply. Psy., 57(2), 137-141.

今川民雄 1981 Ambiguity tolerance scale の構成(1) ——項目分析と信頼性について——北海道教育大学紀要32(1), 79—93.

Jones, M. B. 1955 Authoritarianism and intolerance of fluctuation. J. Abnor. Soc. Psy., 40, 125-126.

穐山貞登 1975 現代の心理学3創造性 培風館

Kaplan, J. M., 1952 Predicting memory behavior from cognitive attitudes toward instability. Amer. Psychologist, 322.

河合隼雄 1970 カウンセリングの実際問題 誠信書房

Keenan. A. 1978 Selection interview performance and intolerance of ambiguity. Psy, Rep., 42, 353-354.

Kenny, D. T., & Ginsburg. R. 1958 The specificity of intolerance of ambiguity measures. J. Abnor. Soc. Psy., 56, 300-304.

Kirton, M. J. 1981 A reanalyses of two scales of tolerance of ambiguity. J. Pers. Assess., 45(4), 407-414.

Klein, G. S. *et al.* 1951 Perceptual attitudes toward instability : I. Prediction of apparent movement experiences from Rorschach Responses. J. Pers., 19, 289-302.

Klein, G. S. *et al*, 1962 Tolerance for unrealistic experiences: a stady of the generality of a cognitive control. Brit. J. Psycho., 53(1), 41-55.

小林哲郎 1981 Ambiguity Tolerance 概念について——Rigidity 概念との差違を手掛りとして——京都大学修士論文

Levitt, E. E. 1953 Studies in intolerance of ambiguity : I. The Deaision Location Test with grade school children, Child Develop., 24, 263-268.

MacDonald. A. P. Jr., 1970 Revised scale for ambiguity tolerance: reliability and validity. Psy. Rep., 26, 791-798.

Middlebush, C. W. 1975 The relationship of counselor's tolerance of ambiguity to counselor's behavior in the counseling interview: a follow-up study. Diss. Abst, Inter, 35 (12-B: Pt 1), 6103-6104.

Millon. T. 1957 Authoritarianism, intolerance of ambiguity and rigidity under ego and task involving situations. J. Abnor. Soc. Psy., 55. 29-33.

森 知子 1983 質問紙法による人格の二面性測定の試み，心理学研究 54(3) 182—188.

鳴沢 実 1975 共感と心理療法 春木豊・岩下豊彦(編) 共感の心理学第4章 川島書店 Pp. 65-120.

Norton, R. W. 1975 Measurement of ambiguity tolerance. J. Pers, Assess., 39(6), 607-619.

西山俊彦 1973 カリフォルニア人格検査 (CPI) の構造分析とその純化 サピエンチア英知大学論叢, 7, 1—14.

O'Connor, P. 1952 Ethnocentrism, intolerance of ambiguity and abstruct reasoning ability. J. Abnor. Soc. Psy., 47, 526-530.

Rokeach, M. 1960 The open and closed mind. New York: Besic Books,

Rydell, S. T., & Rosen, E. 1966 Measurement and some correlates of need-cognition. Psy. Rep., 19, 139-165.

Shaffer, D. R. et al. 1974 Dogmatism and tolerance for ambiguity as determinants of defferential reactions to cognitive inconsistency. J. Abnor. Soc. Psy., 29, 601-608.

Smock, C. D. 1955 (a) Influence of psychological stress on the intolerance of ambiguity. J. Abnor. Soc. Psy., 50, 177-182.

Smock, C. D. 1955(b) The influence of stress on the perception of incongruity. J. Abnor. Soc. Psy., 50, 354-356.

Steiner, I. D. 1954 Ethnocentrism and tolerance of trait inconsistency. J. Abnor. Soc. Psy., 49. 349-354.

Taft. R. 1956 Intolerance of ambiguity and ethnocentrism. J. Consul. Psy., 20, 153-154.

Tucker, R. C. *et al.* 1974 Ambiguity tolerance of therapists and process changes of their clients, J. Counsel. Psy., 21(6), 577-578.

吉川 茂 1980 Ambiguity Tolerance の程度と適応性 関西学院大学文学部教育学科研究年報, 6, 35—39。

Zacker, J. 1973 Authoritarian avoidance of ambiguity. Psy. Pep., 33, 901-902.

(本研究科博士後期課程)